

愛泉女短大 角山 幸洋

1. わが国の地機（いざり機、座機、神代機、などともいう）は、弥生時代の原始機に機台が付属したものであるが、この導入はおそらく5世紀後半の段階に大陸より新機法伝播により改革されたものと思われる。ここで問題とするのは、地機が国内で地域的にあるいは形式的にいかなる変遷をとげたかを、実証的に検討することにある。

2. この目的から、全国各地に現存する地機を、構造、型式、操作、名称の点から調査し一定の規準によって実測図を作成した（なお今回は地機のみを取り上げ、高機その他の機織具は省略する）。この調査方法は考古学では形式学上からさかんであるが、民俗学、染織史においては、いまだ採用するにいたらない。

3. 知見に上った成果は多いが、主要な点は機台の型式から東北日本では垂直型（あるいは座敷型）、西南日本では傾斜型（あるいは土間型）と仮称される二型式に大別され、境界地域は中部山岳地方にある。そして傾斜型の祖型は、徳島県山間部で太布を製織する地機であり、垂直型はL字型の支持柱をもつ関東から東北地方にかけて分布する単純な型式を祖型におくことができよう。この二型式からの発展は単純な構造に起因する操作上の欠点を改良し、各地域で独特の型式を生ずるにいたった。これには地理的環境、機織技法の伝播、繊維材料の特性、機大工などが相互的に関連しているものと考えられる。